



高橋哲学の方法

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 野辺地, 東洋 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001391

高橋哲学の方法

野辺地 東 洋

北海道教育大学岩見沢分校哲学研究室

Tōyō NOBECHI: Die Methode der Philosophie Takahashis

目 次

はじめに	しての‘純粹（否定）運動の弁証法’
I 予備的方法	e 過程の弁証法と二極対立の弁証法との中間にある‘場所の弁証法’
A 非理論的存在を非理論的に獲得する方法	f 二極を媒介する中の弁証法
B 非理論的存在を理論的に獲得する方法	C 現象学的方法’
II 問題学的方法	D そのほかの方法
III 問題処理ないし解決の方法	a 了解的ないし解釈学的方法
A 批判的方法	b 実践的行為の方法
a 価値発見の方法	1 実用主義的方法
b 思维的産出の方法	2 実践ないし行為の弁証法
B 弁証的方法（弁証法）	イ 唯物弁証法
a 過程的な一極弁証法	ロ 田辺博士の弁証法
b 対立的な二極弁証法	ハ 西田博士の弁証法
c 円融的な三極ないし無限極弁証法	c 神秘的方法
d 二極対立の弁証法の反面と	おわりに

はじめに

これまで高橋哲学の成立と組織とについて述べたが¹⁾、その方法について一応のまとめをしておきたいと思う。高橋里美博士は昭和22年に、彼の哲学論に属する仕事として、“哲学の本質”（福村書店）なる一書を公けにしているが、そのなかに“哲学の方法”と題する一章がある。これに掲げられた内容はそのまま高橋哲学の方法として妥当するものと解釈することができる。なぜならば高橋博士は哲学組織家として、みずからの哲学組織を、たとえ絶対的ないみではないにしても、ひとまず理想的なものとして考えたことは当然であり、したがって、“哲学の方法”なる一章の内容となるものは、自己の用いた方法そのものでなければならぬからである。この書物はある程度、啓蒙書的な、あるいは概説書的な性格をもってはいるが、その底流をなすものは著者自身の組織的立場であり、したがってそこに盛られたさまざまな内容は高橋哲学の立場から評価されているのである。“哲学の方法”の章についていうならば、そこには史上おこなわれてきたさまざまな方法が述べられているが、それらは高橋哲学の立場によって扱われ整理されている。このようにみるならば、この章の内容はそのまま“高橋哲学の方法”といわれなければならないものと解することがで

1) 本誌、第16巻第1号および第17巻第1号。

きる。いいかえるならば、高橋哲学（哲学論をも含めたいみでの広義の）における方法論は“高橋哲学の方法”と一致するのである。かかる理由から私はこの章を主たるよりどころとして高橋哲学の方法を展開していこうと思う。

これまでも高橋哲学の方法を主とした問題について、まったく触れなかったわけではない。“体験の事実そのものへ！”という標語から、現象学的方法にたいする最高の評価までを私は述べておいた¹⁾。これらの点は今のばあいも記憶されるべきであろう。

I 予 備 的 方 法

A 非理論的存在を非理論的に獲得する方法

哲学の対象となるものは存在全体である。存在するものの中にはさまざまな性格のものがあるが、当面の必要性からこれを理論的なものと、非理論的なものとに分けて扱うことにする。ところで後者をまず原初的に獲得するにはどのようにしなければならないか。これには非理論的方法によらなければならない。芸術的な性格をもつ内容のものはまず芸術的方法によって、つまり芸術的制作者や観照ということによってはじめて入手されるのである。倫理的な性格のものは意志や行為によって原初的に獲得される。宗教的内容の存在は宗教的体験を通じて把握される。勿論これらの非理論的存在も、現実の状態にあっては、さまざまな程度で理論的要素を含んでおり、またある程度理論化された部分までも混じえているものも少なくない。けれどもそれらのものの基礎的な性格は非理論性である。したがってかかる非理論的存在の第一次的獲得方法はそれぞれの対象の性格に応じた非理論的方法でなければならない。ここにおいて予備的方法の第一次的なるものにおける格率が次のようにいわれることとなる。“非理論的存在をそれぞれに適應する非理論的方法によって獲得せよ”。なぜ予備的といわれなければならないかというに、それはのちの理論的探究のために必要な段階だからである。したがって、はじめから理論的な性格の存在にとつては、この第一次的予備的方法は用いられなくてすむのである。それはともかく、哲学の対象は存在全体であるから、この原初的獲得方法も、特殊な、また部分的な原初的獲得方法の総括であるところの全体的方法である。

B 非理論的存在を理論的に獲得する方法

予備的段階は以上で終わったわけではない。獲得された非理論的なものを理論的なものに、その性格を変更しなければならない。そこまで予備的段階は続くのである。これが非理論的存在を理論的に獲得する方法なのである。そしてこのさい用いられるのが、フツサルから学ばれた現象学的方法にほかならない。すなわち与えられた対象を無関与的に反省して、そこに見いだされたものをそのままに、なんらの人為的構成を加えることなく、忠実に記述する方法である。いわゆる“純粹記述”である。動機において必ずしも同じとはいえないであろうが、“松の事は松に習へ、竹の事は竹に習へ”²⁾の松尾芭蕉の格率に似た発想のものであろうか。ここでわれわれの格率として立てられるべきものは次のようである。“対象を無関与的に理論的に反省して、これを純粹に記述せよ”。この現象学的方法はそれぞれの特殊科学の研究にさいしても欠くことのできないものであり、この方法はあらゆる学的研究にとって基本的な方法として、その適用は広範囲にわたるべきものである。それは対象の理論的獲得の一般方法として全体的ないみをもつものであるから、とくに存在全

1) “高橋哲学の成立”，8。

2) 服部士芳，“三冊子”，日本古典文学大系，岩波書店，398ページ。

体にかかわる学としての哲学の方法としてとりあげられなければならないことは当然である。いまは予備的段階における方法として、現象学的方法の効用を述べたが、のちに高次の研究段階においてもこの方法はそのすぐれた性能をあらわすべきものである。

II 問題学的方法

これまで述べられた予備的方法によって獲得されたものは、われわれの終局的に求めている対象ではない。それは研究の素材にすぎないものである。しかしながら、その素材は問題をなんらかの仕方で含んでいるのであって、問題はこの素材を離れては存しないのである。はじめの現象学的反省によっては、素材に内含されている問題はまだ十分にあらわになってはいない。この問題をとりだしてあらわにする仕事は、問題発見の方法すなわち問題学的方法によってなされるのである。これは古くはアリストテレスによっておこなわれ、近くはニコライ・ハルトマンによって復活されたものである。アリストテレスはみずから実行しているように、研究の主題についてどのような見解を先人たちが述べているかを検討して、それらのあいだに存する矛盾を発見し、それを手がかりとして問題の展開をはかった。このやりかたはそれとして意味のあることであるが、単にそれにとどまらず、ただちに素材にぶつかって素材自体のうちに含まれている矛盾を発見することによって、さらに適確に問題があかるとみに出されるのである。この素材処理の方法は何かというに、それは分析と総合とである。ここで分析とは一つの素材をさらにその成分に分けることである。総合とは一つの素材を他の素材と合わすことである。この両者をそれぞれ用いることにより、あるいはまた分析と総合とのそれぞれの結果を結合することによって、蔽い隠されていた矛盾があかるとみに出てくるのである。このばあいの格率は次のようにいわれるであろう。“素材の分析と総合とによってそのうちに含まれている矛盾または問題を発見せよ”。この問題発見の方法も現象学と同じくあらゆる科学部門の研究において用いられるべきものであるが、根源的探究をこととする哲学にあってとくに重要視されなければならないものである。

III 問題処理ないし解決の方法

問題はその性格として当然みずからの解決を要求するものである。したがって発見された問題をどのように処理して解決にみちびくかが、ここで問題となる。この問題解決のための方法こそが学の方法として最大に重要なものなのである。一般に学の方法と考えられているものは、ほとんどこの分野に関するものである。この段階においては、格率は次のようにいわれるであろう。“発見された矛盾を止揚せよ”と。

さて、それぞれの特殊科学はそれぞれの性格にしたがって独自の問題処理方法をもつが、哲学におけるそれはどのようなものであるか。ここでわれわれは哲学的方法の中心部に到達したことを知るのである。古からわれわれに教えられたものとして、まず神秘的方法があげられるであろう。これは対象獲得ないしは再獲得の方法としては、あるばあいには使用価値の高いものであるが、学としての哲学の問題解決の方法としては適当なものではない。このことは前にもすでに述べられたが¹⁾、のちに改めて触れられなければならない。また一般にあらゆる学にとって有用なはたらきをもつと考えられる経験的方法も古来いわれているが、これも対象獲得の方法として扱われるべきものである。従来名声の高かった問題解決の方法としてあげられるべきものは、批判的方法と弁証的

1) “高橋哲学の組織”，II, C.

方法と現象学的方法とであろう。これらはいちおう学の全体の分野にたいして普遍的に妥当するものとして通用してきたものであり、立場による見解の相違もあろうが、十分に理論上にも耐えられるものとしておこなわれてきたものである。

高橋博士はこれら三つの哲学的方法を高く評価して掲げているが、単にこれらを並列的に解説するだけでは高橋哲学の方法とはならない。もしそうであるならば、せいぜいそれは一般の哲学概説書の一部となるだけのことである。博士はまず批判的方法からはじめて、方法論的要求がついには弁証法的方法を経て、現象学的方法にいたらなければやまない、というぐあいに、方法論の必然性をもって三者を一つに貫く形をもって呈示している。このようにすることによって、博士においては方法論の歴史が同時にまた方法論の論理的組織であるということ、あるいはこれを拡張するというならば、哲学史が哲学であるということを実にみせてくれているのである。それは以下のごとくである。

A 批判的方法

a 価値発見の方法

ウィンドルバントの解するところによれば、批判的方法とは現象を可能にする根拠を発見することによってそれを根拠づけること、あるいは権利づけることを任としたもので、生成的ないしは発生的方法のように自然必然的な因果関係によって現象を説明することを目的としたものとは異なる。後者が事実問題を扱うのに反し、前者は権利問題を扱うのである。したがって批判的方法は普遍妥当な価値を前提するものでなければならない。この価値を発見する方法として、現象に附属する価値をその現象の経験的諸要素から分離する、という一種の分析的方法をリッカートは考えて、これを“分離的抽象”と名づけている。もともと批判 Kritik なる言葉はギリシャ語の Krinein から出たものであり、これには“分ける”の意味がある。カントの批判的方法も一つの分析法なのである。博士はここでさらに、リッカートは思惟を根本とする新カント派の立場から、その“分離的抽象”を一つの推理作用と解しているが、むしろフッサールのような“理念的抽象”ないしは“本質直観”にもとづく解すべきであらうとしている。フッサールやその学徒がこの点からカント哲学の現象学的解釈を試みようとしている点に博士も賛意を表し、批判論から現象学への路がここに開かれるものとしている。

b 思惟的産出の方法

さらに同じ批判的方法のうちでも、西南学派の分析的方法に主力をおく考えかたから転じて、綜合面に重点をおくもう一つの傾向のものへと、方法論的要求は展開することを博士は説くのである。それはマールブルク学派の批判的方法である。コーヘンは彼の中心概念であるところの創造的な純粹思惟によって、判断作用における統一が産出されるものと説く。この考えかたはあくまで論理主義的なものであるから、彼の解する批判的方法は、ウィンドルバントの方法における対立物であるところの生成的方法とは質の違った生成的方法である。コーヘンにおいては、与えられている根拠を分析によって発見するというにはならず、むしろ純粹思惟によって根拠づけるという綜合的生産の方向がたどられるのである。このように批判的方法は、西南学派の静的なものの分析的方法からマールブルク学派の動的産出による綜合ということに展開していき、それは、ついに次に述べる弁証的方法に接近するものとなる。

B 弁証的方法

批判的方法を徹底し、その分析と綜合との統一を実現せしめんとするのが弁証的方法である。これによれば、分析が進行することは同時に綜合が強化することである。またその逆でもある。いず

れにしても、これらの矛盾した対立項は統一される必然性にある。このように批判的方法における対立した分析と総合との両項はあらたなる統一物の二契機となって矛盾は解決される。これが弁証的方法の優越した成果である。

ところで弁証的方法（弁証法）はもとより方法論的にも存在論的にも問題となるものであり、また両者の態度も相互に無関係ではありえない。だが、いまはそれらのことには触れないで、弁証法の型を規準として考えられる、そして世上におこなわれた、さまざまな弁証法について分類してみることにする。それは次のようである。

- a 過程的な一極弁証法
- b 対立的な二極弁証法
- c 円融的な三極ないし無限極弁証法
- d 二極対立の弁証法の反面としての“純粹（否定）運動の弁証法”
- e 過程的弁証法と二極対立の弁証法との中間にある“場所の弁証法”
- f 二極を媒介する中の弁証法

これらの分類のうち一極から三極までのものは、ヘーゲルの論理学の組織のなかにみられるものであり、弁証法類型としてもよく知られているが、あわせて d, e, f にみられるものをも典型的に博士は見立てているのである。そして博士はこれらのいずれもは、結局は包弁証法的全体性の概念に到達せざるをえないものと考えている¹⁾。その詳細な叙述をここでするわけにはいかないが、ここに包弁証法という、博士によって創始された言葉について説明を加えなければならない。そもそも包弁証法は、それ自身は弁証法の一極ではなく、弁証法そのものの包越的止揚である。包越は一つの超越であるが、単なる超越としての超絶ではなく、包むことによって越えることである。そしてこの包越は、包むということは単に外的に包むことではなく、同時に内的に通徹することである。したがってそれはまた内在である。しかしこの超越的内在または内在的超越は、超越と内在とのいわゆる弁証法的統一ではない。もしそうであるならば包弁証法的全体性はそれ自身弁証法的であって、弁証法の包越ではありえないはずである。それゆえに超越と内在との包越的統一形態は、両者の弁証法的統一形態とは原理的に異なるものでなければならない。このいみで包弁証法は弁証法の根拠であるということを防げないが、しかし単なる根拠ではなく、包越的根源である。すなわちそれは本来のいみでの根拠ないし根源をも包越するものであり、またこの包越によってはじめてそれらを可能にするところのものである。

弁証法の包越的止揚はただちにその弁証法的自己止揚ではないが、これを機縁としてもおこなわれる。そして弁証法の自己止揚は弁証法の自己主張の逆説的な結果である。弁証法の自己は弁証法にほかならないから、弁証法の自己主張はそれの弁証法的自己主張でなければならない。したがってそれは弁証法の弁証法であり、したがってまずそれは弁証法自身の否定となって現われるであろう。かくして弁証法は弁証法的に非弁証法的なものに転化するのである。然るにこの転化はまさに弁証法的転化であるから、その結果としての非弁証法的なものは、それ自身また弁証法的なものでなければならないであろう。ここに永久に解決されそうにもみえない二律背反が現われる。けれどもこの二律背反を解決しようとして、またそれを解決しようとする自身をもって登場したのが、そもそも弁証法自身にほかならない。そしてこの解決はおそらく自己矛盾そのものの端的な自覚によって、あるいは自己否定的無限進行そのものの必然性の自証によってえられるであろう。ただしこの自覚

1) “包弁証法”，52ページ以下。

と自証とは普通のみでの自覚、すなわち他者を媒介とする反省的な自覚とは異なり、なんら反省的運動をもいれる余地を残さないところの端的な直証、ないし直覚、いなむしろ単純な自己指定ないし自己主張でなければならぬであろう。しかしひとびとがかかる自覚と自証とについて語るとき、じつはすでに何らかのいみにおいて弁証法自身の固定化が、したがって弁証法的運動の自己否定が結果しつつあると考えるべきである。しかるに弁証法の弁証法的自己主張のさいすでに達せられるこの自己主張は、もはやさきの自己主張のように内弁証法的なものではなくて、弁証法の一点集中的自己突破であり、かかるものとしてのその自己止揚である。そしてこれを可能にするものは、じつに包弁証法的全体性にはかならない。弁証法の自己止揚はそのじつは弁証法自身の力だけでは遂行しえないものであり、それが包弁証法的全体性にあずかることによって、いなむしろかかる全体性に包越されることによってはじめて可能となるのである。そしてこの被包越は同時に弁証法自身の自己完成である。

包弁証法的全体性は弁証法を非弁証法的に包むものであるが、しかし実際においては単に弁証法のみを包むのではなく、それ以外の一切の現象をも包むところの全体性である。ただかりに弁証法に視点をいたたために包弁証法的とよぶにすぎないのであって、同一の全体性は他の多くの道によっても同様に到達されるのである。以上にみられるごとく、包弁証法はすでに弁証法を包越したものであり、いわば包方法的なものである。それ自身は方法ではなく、組織それ自体である。そこでもとにもどって、いかなる種類の弁証法でもそれ自身の要求から、この組織の全体性へと到達せざるをえないということ、博士は説いたのである。そして全体的体系存在が弁証法にたいしてどのように優越した内容をもつものであるかについて、次の諸点を掲げている。

1. 弁証法においては有と無との対立が普通に非連続的と考えられているのに反し、体系存在はそのうちに無から有への連続的生成と有から無への連続的生成とを内含する。
2. 弁証法においては生成が有と無との統一の結果はじめて成立するのに反し、体系存在においては有と無との対立は、すでに上の二重の生成を前提している。
3. 弁証法においては対立者とその相互限定によって高い段階へと進むが、体系存在においては両者の対立と同一段階においてすでに合が成立している。そしてそれは体系存在それ自身である。
4. それゆえに弁証法的運動は生成である限り完全に始を終に止揚しえないのに反し、体系存在は始中終を完全に止揚しうる。
5. 弁証法が生成であるかぎり、その統一はつねに新しい矛盾をひきおこし、ついに最後の統一に到達することはできない。しかるに体系存在はこの弁証法的生成そのものを包越するものであるがために、矛盾の統一の生成を可能ならしめるとともに、真に矛盾即統一の関係を可能ならしめる。
6. いわゆる形式的悟性論理の立場は弁証法論理の立場に止揚しつつすことのできない側面をもつものであって、それはただ包弁証法的立場によってはじめて成立するのである。したがって、それは弁証法論理以上の立場であるということもできる。それはこうである。体系的存在においては正と反との対立に無頓着な中立の中和的なものの存在が可能となる。対立する正と反とをそれぞれ $+A$ と $-A$ とをもって表示するならば、この中立者は単純な A をもって表示することができる。これこそが形式論理学における自同性に該当するものである。 A のかわりに O をもってするならば、これは矛盾にまで進まない中性的否定であって、矛盾の存在を許さない形式論理学の矛盾律の立場である。われわれが弁証法に

ついて論ずることも、弁証法論者が自己の立場をわれわれに説明することも、これによつてはじめて可能となる。

このようにみるならば、弁証法はそれにもなう中間的性格をみずから呈露したものといふことができるであろう。すなわち、それはその止揚しえない生成と体系存在との合成による中間的存在であり、この合成のさまざまな仕方にもとづいて、さきに掲げたような種々の類型が派生するのである。なおさきの類型のなかに、はいらなかつたが、田辺元博士の唱えた絶対弁証法なるものがある。これはヘーゲル流の弁証法を観念弁証法とみ、これとマルクス流の唯物弁証法とを二つの契機とするところの行為の弁証法である。高橋博士によるならば、この弁証法の意義と価値とは主として対象獲得の方法ないしは対象再構成の方法たる点にある。理論というものが現実存在としての行為から区別され、これを静止的な抽象の必然性と解する高橋博士の立場からするならば、行為の絶対弁証法よりはヘーゲルのごとき観念弁証法（ヘーゲル自身はそれを絶対弁証法ともよんでいる）の方が理論的哲学の方法として一層ふさわしいものというべきである。ただしヘーゲル的な弁証法もはたして理論的哲学の方法として究極のものであるかという点、そのようには考えられない。存在の一切が概念の弁証法的自己運動の結果だとするのは、汎理主義以外のなにもものでもない。むしろ逆に、概念がすべての存在への弁証法的輪廻転生のあいだに、その固有なる理論的性格を喪失する危険におちいる恐れはないか。高橋哲学の立場は、たといその哲学のありかたとしては学としての理論的哲学のそれを主張するにしても、汎理主義を唱えるほどに高く論理的なものを評価するものではない。論理的なものほかに、非論理的なもの、超論理的なもの、包論理的なもの存在が認められなければならない。高橋哲学自体も実在の根本的なものを感情的なものとしているのであることは、まえにも述べたとおりである。それゆえに概念の弁証法的運動は実は世界のロゴス化ではなく、せいぜいロゴスの世界遍歴にすぎない。しかもこの概念の世界遍歴はいまだ理論の極致を示すものではない。理論の極致とは超過程的に世界を直観することによってえられるのでなければならない。それは概念の弁証法的運動の出発点からその到達点にいたる過程全体を一瞬のもとに把握した永遠の像である。この像はそれ自身一つの存在領域を形成するものであるが、像であるかぎり原物そのものではなく、それにたいして理論的距離をもつものである。けれどもそれは原物の像として原物につらなり、その一端をなし、しかも永遠なる像として過程以上のものである。学としての哲学の理想はまさにかかるといふ純粋な理論でなければならない。

われわれはいまや直観的方法にまで到達した。さきに批判的方法の西南学派の方法について述べたとき、批判主義から現象学への立場への移行が瞥見されたが、ここで本格的に現象学的方法の登場を必要とするにいたつたのである。この方法こそが“分離的抽象”から“理念化的抽象”への要求に応じ、過程的な弁証法から全体的なる包弁証法への必要に答え、非理論的な存在をも含めての包論理的世界の処理に即応したものであると考えられるのである。

C 現象学的方法

この方法でいうところの現象学的還元は、超越的に与えられた対象を意識に内在化するといういふ点においては、ある程度まで対象処理の方法とみられないことはないが、なお主として対象獲得の方法たる性質を帯びるものである。現象学はこのようにして獲得された現象を探究し処理しなければならない。それは“意識の方法”といわれる現象学的反省の方法によるものである。それは自由変更の操作をもつ本質的還元によって、事実から本質への過程をたどり、本質直観によって本質の把握を確実にする。この点にも、カントが空間・時間を経験の先天的要素とした形而上学的究明の方法に類似するものがあり、批判哲学から現象学への橋渡しが考えられるといわれる理由がある。

フッサールはその著“イデー” (Ideen) で次のようにいっている。“われわれが意識そのものに即して、いいかえれば純粋内在において、本質的に透視しうるもの以外のなにものをも要求してはならない”。(Nichts in Anspruch zu nehmen, als was wir am Bewusstsein selbst, in reiner Immanenz uns wesensmässig einsichtig machen können. S. 113.)。本質直観は経験的直観にもとづくことを必要とするが、それは明証を伴うものであり、経験的帰納とはまったく違ったものである。もちろん思惟による演繹ではない。それほどこまでも直観による対象の分析なのである。自由変更の操作にさいしてみられる合致綜合はある種の綜合作用であるには違いないが、それに即しておこなわれる本質直観は非本質的なものから本質的なものを分析する作用である。かくしてフッサールの上記の言葉を格率として“事実そのものへ!” (Zu den Sachen selbst!) の標語がうまれるのである。われわれはこの標語にしたがって、われわれの前にある現象を無関与的に観察し、その本質規定を直観的に把え、その結果を正確な術語をもって純粋に記述しなければならない。このいみで現象学は本質類型の記述学である。

以上のような、事象そのものに即して公平無私な理論的反省をなし、直観をそのさいごの抛りどころとする現象学的方法は、哲学を厳密なる純粋理論の学とするかぎり、それにもっともふさわしい方法であると考えられる。ことに高橋哲学が体系的全体性というものを根本組織として考えている以上、包弁証法的な全体的方法として、経過的思量的な諸方法よりも全体的直観的な現象学的方法に優位を与えることは、きわめて当然なことである。高橋博士もいうように、フッサールの現象学的方法は対象獲得の最初の理論的方法であるとともに、対象処理のさいごの方法である。それは実に哲学的方法の頂点をなすものである。そしてこのことはまた高橋哲学の方法における現象学的方法の位置づけを適切に物語るものである。

D そのほかの方法

a 了解のないし解釈学的方法

高橋博士は上述の諸方法のほか、なお、ディルタイやハイデッガーの了解のないし解釈学的方法をあげている。とくにハイデッガーの方法については、存在者の存在をその隠蔽された状態から解放するという点で、フッサールの現象学と根本的に同じであるとみている。しかし、ディルタイの生の哲学の了解的方法もハイデッガーの実存哲学の解釈学的方法も、いずれもフッサールのように無関与的な理論的態度によって与えられた現象をそのままに反省することを目的とするものではないとしており、この点では、高橋哲学の最高方法としては不満多きものといえるであろう。他面、この方法の長所をも次のように指摘している。フッサールは現象学的還元による超越的存在の内在化を説くのではあるが、内在化された対象は依然としてこれを反省する主体のもとにある。このいみで彼の現象学的反省はなお外的反省の域にとどまるものである。しかるに了解的方法ははじめそとに表現したものを再びその本源たる体験に還帰せしめるのであって、一種の自覚作用とみることができ。ハイデッガーの解釈学的方法も对象的認識の方法ではなくて、現存在の根本的自覚の方法である。ディルタイの方法は自覚の広さにおいてまさり、ハイデッガーのそれは自覚の深さにおいてまさるといような差はあるにしても、いずれの方法によっても探究の結果が逆に探究者自身の精神生活に影響し、その内容を次第にゆたかにし、その理解をますます深めていくという循環作用が成立するのであって、この点にそれらの方法の長所が認められるべきである。

このようにディルタイやハイデッガーの方法は、博士によれば、もはやフッサールのそれのような“無関与的な理論的態度”によるものではないのである。しかしながら、博士によれば、理論的な観想的な生活から現実的な実践的生活に近づく哲学的方法として、第一段階のディルタイ的な了

解の方法も第二段階のハイデッガー的な解釈学的方法も、いずれもいまだ真に実践的な生活に透徹することはできないのである。それらはなお観想的性格を脱却しないものであって、了解や解釈をもっては存在そのものを変更することはできない。

b 実践的行為の方法

存在の変更は実践的行為をまっぴらしてはじめて実現される。したがって現実生活に徹底しようとするひとびとは、了解的解釈的方法に満足しないで、当然、実践を哲学の方法として求めるにいたる。そこで

1. 実用主義的方法
2. 実践ないし行為の弁証法
 - イ. 唯物弁証法
 - ロ. 田辺博士の弁証法
 - ハ. 西田博士の弁証法

の諸方法があげられる。実用主義的方法において試行錯誤が必要な手続きとして重きをなし、唯物弁証法において矛盾の実践を通じての解決が強調され、観念弁証法と唯物弁証法とのいわゆる総合としての田辺博士の絶対弁証法において行為がその枢軸となり、西田博士の場所的弁証法において、その芸術的性格が行為主義者からは非難されるにしても、なお行為的直観の形で実践的性格を濃厚に示していることを思うとき、これらはすべて観想的方法よりも実践的方法への傾斜をもつものとして、静的全体性に包越されている部分的内容の現実的生成に即応する方法として、その位置を与えられることができるのである。上記の実践的諸方法のうち弁証法に関する田辺、西田両博士のものは、すでに弁証的方法の項でも掲げられ、あるいは問題にされたが、ここでは実践的性格類型のものとして、再び掲げられたのである。

c 神秘的 方法

これまで述べられたさまざまな方法のほかにも、なお神秘的 方法がある。これについてはすでに触れられたが¹⁾、いちおう方法論としての組織のうえで、ここに掲げておく必要がある。この方法はかつて述べられたように、哲学の限界状況ないしは哲学外(宗教)に関する方法であり、高橋博士もいうとおり、対象獲得の方法ないしは対象再獲得の方法としては哲学に有用であっても、学としての哲学の問題解決の方法としては適したものではない。しかし哲学内の方法としてさまざまな方法が掲げられ、さいごに哲学が尽きるころに、その限界に関する方法が用意されることもまた意味があると思われる。“柳紅花緑”あるいは“この暗黒は空明なる太陽の光”という博士の言葉はこの点で深く味わわれるべきである。

お わ り に

これまで現象学的方法を頂点として、問題解決の方法を多くあげたが、これらは高橋哲学の組織構造にそれぞれ適応するものである。すなわちその全体的なる体系存在に対応する方法としては、全体を直観的反省によって処理しうる現象学的方法がこれにたちむかい、体系存在に包越されている現実存在に対応する方法としては、その価値とか運動とかの問題に関しては、批判的方法や弁証的方法がこれに対処するということになるのである。また現実存在のうちでも、多かれ少なかれ実践の方向へ傾斜した存在については了解ないし解釈学的方法から実践ないし行為の弁証法がこれに当ることになる。そして存在の限界に関しては、あるいは存在から無への包消に関しては神秘的方

1) “高橋哲学の組織”，Ⅱ，C。

法が責任をもつということになる。それにしてもいずれの方法もが得た結果は、さらにもう一度直観的に反省しなおされなければならないのが真の哲学、いいかえれば無関与的にして厳密なる哲学の立場というものである。

了解ないし解釈は純理論的な直観と実践との中間に位置する働きであるが、どちらかといえば、実践よりは理論に近いものである。実践主義者が単なる解釈を観想的なものとして非難する理由は十分にある。純粋理論の立場からみるならば、解釈は実践の方向へ傾いているとはいえ、そこには分析や記述の手續きにおいて厳密に理論的なものが見いだされるのである。この方法にくらべるときは行為的弁証法は実践のうちにはるかに深入りしたものである。しかしそれがなお弁証法論理を主張し、それが実践と理論の統一であることを主張するとき、それは単なる実践ではなく、理論的なものの汚染(?)を感じないわけにはいかない。このように純粋理論的なものから不純粋理論的なものにいたるまでの存在と方法とを包含するのが、高橋哲学の組織であり、またそれに対応する方法なのである。

高橋博士は結論として次のようにいう、“要するに広義における哲学の方法は、対象獲得の全体的方法と対象処理の全体的方法と対象再獲得ないし再構成の全体的方法より成るところの全体的方法である。これ哲学の対象は全存在であるということに應ずるものである。しかし狭義における哲学の方法は対象の理論的処理の方法の全部よりなる全体的方法であり、その頂点をなすものはフッサールの主張するように公平無私な無関与の直観でなければならぬ。これ哲学する主体の態度が理論的なことに應ずるものである”(“哲学の本質”, 88ページ)。かつてニコライ・ハルトマンが先験的方法と記述的方法(現象学的方法)と弁証法との三者の関係を彼の立場で論じて“組織的方法”(Systematische Methode)なる論著をなしたが(Logos, 1912)、高橋博士はさらに大なる規模でこの先蹤を凌駕したといえることができるであろう。そしてハルトマンのばあいにもいえることであろうが、いまのばあいはじめにも述べたとおり高橋博士の書いた“哲学の方法”が“高橋哲学の方法”に一致することを発見するのである。